



パフォーマンス課題に対する 多様な視点からの評価の役割

—教師評価・ピア評価・自己評価を比較して—

はじめに

私達は日々の生活の中で様々なパフォーマンスを行っているが、特に指導を受けなくても、反復練習や経験を積み重ねていくことで、一定の水準にまでパフォーマンスは徐々に向上していく。しかし、より高い水準にパ

フォーマンスを向上させるには、個人の努力や練習のみでは不十分である。そのため、専門知識を持った指導者の下で、適切な診断やアドバイスを受け、より良い練習を行うことが必要である。

本稿では、筆者が留学生対象の授業内で実践しているディベートをパフォーマンス課題の例に挙げ、ディベートの評価に取り入れている教師評価、ピア評価、自己評価の3種類の評価の特徴を述べた上で、パフォーマンス

課題に対する多様な視点からの評価の役割を検討していく。

1 パフォーマンス課題と パフォーマンス評価

パフォーマンス課題とは、パフォーマンスの能力を完成作品および実技の実演によってデザインされた課題である。パフォーマンス課題の構成要素として、①使われる知識やスキル、②特定の課題や文脈、③生み出された作品、の3つが挙げられる。また、パフォーマンス課題のタイプには、レポートや小論文、詩や小説、ポスター、図表やグラフ、模型、絵画や彫刻などの完成作品のパフォーマンス課題と、口頭発表、ロールプレイ、演奏や演技、実験器具の操作など、その場で発表させるパフォーマンス課題の二つがある(田中 2005)。

パフォーマンス評価とは、事実や個別のスキルの評価に重点を置く従来のテストとは異なり、生徒の学習にとって、もっとも重要なこと、すなわち様々な現実的な状況や文脈で知識とスキルを使いこなせる能力を評価するためのものである(ハート 2012)。

これらをもとに考えると、ディベートはその場で発表させるパフォーマンス課題であり、ディベートの評価もパフォーマンス評価として捉えられる。

2 パフォーマンス課題としての ディベート

2-1 実践の概要

本学の留学生別科には日本語能力試験N1に合格した上級レベルの留学生を対象とした「大学院進学研究コース」が設置されており、必修科目の「口頭表現技術1」では、学期(15週)を通して、複数のテーマでディベートを実施している。

学生はテーマごとに肯定側と否定側に分かれて、テーマに関連する資料の収集、立論や反駁の作成、発表練習などの事前準備を行った後に授業内でディベートを実施する。また、学期中に交代制で学生は司会者およびジャッジも担当し、外からディベートを観察するという役割も経験している。

2-2 ディベートの評価

ディベートの評価には、1) 授業担当教師(以下、教師)による「教師評価」、2) ジャッジ役の学生による「ピア評価」、3) 学生自身の「自己評価」、の3種類の評価を実施している。(表1)

教師評価では、教師が作成したルーブリックを評価ツールとして使用している。ルーブリックとは、成功の度合いを示す数値的な尺度(scale)と、それぞれの尺度に見られる認識や行為の特徴を示した記述(discription)から成る評価指標である(田中 2005)。本実践では、ディベート用のルーブリックとして、立論、質問、反駁の内容の妥当性や、日本語表現の適切さなど

表1 ディベートの評価

種類	実施者	方法	ツール	内容
教師評価	授業担当教師	観察	ルーブリック	評価項目別達成度(5段階) 自由記述(達成度・改善点)
ピア評価	ジャッジ役の学生	観察	採点表	評価項目別採点(5点満点) 自由記述(達成度・改善点)
自己評価	学生	内省	ポートフォリオ	全体の達成度(100分率) 自由記述(達成度・改善点)

を評価項目とし、各項目の成功の度合いを5段階で設定したものを使用している。さらに、教師はディベートを観察しつつ、評価項目ごとにルーブリックの達成度を点数化するとともに、学習者のパフォーマンスを通して気づいた長所と改善点を自由記述形式で記入している。

ピア評価では、教師用のルーブリックを簡素化し、採点表として使用している。ジャッジを担当する学生は評価項目ごとに5段階評価で採点し、パフォーマンスを通して気づいたことを自由記述形式で記入する。

自己評価では、ディベートを実施した学生はディベート実施後にポートフォリオを記入する。学生は自身の学びの過程、成果、および内省を可視化するために、ディベート実施直後に、自身のパフォーマンスの達成度を100分率で評価するとともに、長所と改善点を具体的に記述している。

ディベート実施後には、授業内でフィードバックの時間を設けており、自己評価、ピア評価、教師評価の順に各立場からパフォーマンス評価を行い、クラス全体で情報を共有している。なお、このフィードバックの際には、今後のディベートの準備や実施に役に立つように前向きなコメント（建設的な批評）をするように教師は学生に指導している。

3 多様な視点からの パフォーマンス評価

以下では、教師評価、ピア評価、自己評価の順に、パフォーマンス評価の役割について述べる。

3-1 教師評価

教師は、コース開始前にシラバスを作成しており、到達目標に向けて日々の教育実践を行っている。また、評価ツールとしてルーブリックを使用しているため、パフォーマンス評価の際にも、評価項目ごとに評価基準に基づいて達成度を評価している。さらに、学生のパフォーマンスを包括的評価と分析的評価の両方を適宜使い分け、到達度や改善点を具体的に抽出し、フィードバックの際に活用している。教師は評価基準に基づいた

絶対評価を行っていることから、パフォーマンス評価は比較的厳しくなる傾向にある。

学生の視点から教師評価を捉えると、自身のパフォーマンスの到達度や問題点を客観的に認識することが可能になるものである。特に、初めてパフォーマンス課題に取り組む学生、パフォーマンスのレベルが低い学生や、パフォーマンスに問題を抱えている学生にとって、教師評価はピア評価や自己評価よりも信頼性の高い評価であり、非常に心強く頼りになる存在であるだろう。

以上のことから、専門知識や豊富な指導経験を有している教師には、学生のパフォーマンスの問題点を指摘し、具体的な改善策を提示するという「指導者」としての重要な役割を担っている。

3-2 ピア評価

ジャッジとしてディベートを外から観察している学生は、採点表に基づいて評価しつつも、同じ学生という立場で他の学生のパフォーマンスを評価していることが、採点結果やフィードバックの際のコメントを通して見えてきた。

フィードバックのコメントからは、客観的な評価基準に基づいて評価している一方で、もう一つの評価基準、すなわち評価者自身の持つ独自の基準が採点や記述コメントに反映されていた。例えば、自身のパフォーマンスと比較して優劣をつけたり、学生のパフォーマンスの中で特に目立った点に対して数多くコメントしていた。

以上のことから、同じ立場でパフォーマンスの向上を目指している学生は、単に評価項目に基づいた問題点の指摘や、改善に向けたアドバイスという役割のみならず、パフォーマンス課題の達成に向けて、同じ気持ちでともに歩んでいく「仲間」という役割も担っていると考える。また、ピア評価においては、アドバイスを受ける側の学生にとっては、教師評価と比較すると、同じ立場から意見をもらえるという点でのメリットもあるだろう。

3-3 自己評価

ディベートを実施した学生は、ディベート終了後に、ポートフォリオに達成度や気づきを記入しているが、そ

表2 各評価の役割

種類	評価の判断基準	特徴	役割
教師評価	教師作成のルーブリックに基づいた評価	包括的かつ分析的に学生のパフォーマンスを詳細に診断している	パフォーマンスの問題点を適切に診断し、改善策を提案する「指導者」
ピア評価	教師作成の採点表に基づいた評価	自身のパフォーマンスとの比較や、特に着目した点に焦点を当てる	パフォーマンスの達成に向けて同じ学生の視点で一緒に歩む「仲間」
自己評価	学生の内省に基づいた評価	過去のパフォーマンスとの比較や、自身の設定目標と比較している	パフォーマンスの向上や達成に向けて、自身を支える「もう一人の自分」

の際の評価は学生によってかなり個人差があることが、実践を通してわかってきた。

ポートフォリオには、自身のパフォーマンスの達成度を100分率で記入させているが、学生の評価に対する意識や到達目標の設定によって、評価は異なってくる。この点をフィードバックの際の具体的な学生のコメントを参考にすると、自身のパフォーマンスと他者のパフォーマンスを比較や、設定したパフォーマンスの水準と実際のパフォーマンスの水準との差異が反映されていた。

パフォーマンス課題に取り組む学生には、ポートフォリオの記入を通して、自身のパフォーマンスの達成度や改善点を可視化することが必要である。また、自己評価のみでは、主観的な評価になりやすく、課題達成に向けて不十分であることから、客観的視点としての教師評価およびピア評価にも耳を傾け、適切に取捨選択することも求められる。さらに、自身のパフォーマンスの達成度や改善点を日々モニタリングしつつ、パフォーマンスの向上に向けて、「もう一人の自分」による自己管理の役割も期待される。

3-4 多様な視点からの評価の重要性

上述した3種類の評価を比較したものが表2である。

パフォーマンス課題を遂行する際には、やはり、単一視点からの評価では不十分なことも少なくないため、多様な視点からの評価を適切に組み合わせて、学生のモチベーションを保ちつつ、教師は課題達成に向けて中長期的な視点での指導が重要であると考えられる。

おわりに

本稿では、留学生対象に実施しているディベートの評価から見えてきた、パフォーマンス課題に対する多様な視点からの評価の役割について検討してきた。その結果、教師評価、ピア評価、自己評価には、パフォーマンス課題を達成する上で、それぞれ異なった性格の役割があることがわかった。

現在、学生たちを取り巻く社会状況は刻々と変化しており、就職先や進学先においても、従来の知識量や正確さよりもコミュニケーション能力や問題解決力などが必要とされている。学生たちは、卒業後の社会生活においても、様々な種類のパフォーマンス課題の遂行が要求されるが、自身でパフォーマンスを向上させるためにも、様々な視点からの評価を適切に使用することを学んでおくことが重要であろう。

また、私たち教員も日々の教育実践において、様々なパフォーマンス課題を実施する際には、多様な視点からの評価があることを念頭に置いて、適切な評価方法を選択することが求められる。

参考文献

- 近藤ブラウン 紀美 (2012) 『日本語教師のための評価入門』 くろしお出版
 ダイアン・ハート (2012) 『パフォーマンス評価入門「真正の評価」論からの提案』 ミネルヴァ書房
 田中耕治 (2005) 『よくわかる教育評価』 ミネルヴァ書房